

## 令和7年度第1回東北森林管理局国有林材供給調整検討委員会（概要）

- 1 開催日時 令和7年6月19日(木) 15:00～17:00
- 2 場 所 東北森林管理局 2階 大会議室
- 3 出席者 高田委員、小野寺委員、一条委員、守屋委員、大坂委員、児玉委員、安部委員、伊藤委員

### 4 検討結果

現在、合板・製材工場の原木在庫は徐々に踏み増しされているが、需要の不透明さから、針葉樹原木出材量が回復しておらず、原木価格は強基調が続いている。

一方、製品は、外材流通量が少なくなっているなか、輸入材から国産材への切り替えが進み、役物平割製品や間柱、国産材集成材などに動きが出ているものの、全体的には需要が薄く当用買い中心の荷動きとなっている。

また、製造コスト、物流経費が上昇していることから、製材、合板など各メーカーは製品値上げ要請を進めており、製品価格の底上げ気運を維持することが必要になっている。

今後の需給動向について、木材需要の柱でもある新設住宅着工戸数が、改正建築基準法施行前の駆け込み需要の反動を受けて4月以降減少している等、実需に回復する兆しが見えない。

このため、伐採抑制は続き、原木価格は全般的に強基調（保合）で推移することが予想されている。

需給動向の先行きは依然として不透明であり、引き続き、各製材工場などにおける原木集荷・製品生産・製品の出荷状況や原木輸出などの動向、米国の関税をはじめとする国内外の情勢などを注視する必要があると思われる。

以上のことから、国有林に対しては、「現時点での供給調整の必要性はないが、引き続き管内の市況や需給動向を注視するよう求める。」と報告する。

### 5 主な意見

- 国産材構造用集成材の販売量は前年同月比で30%近い増加となっており、安定的な供給のために、原料となる製材用原木の安定的な調達が必要となってきた。しかし、冬に貯める予定であった在庫の積み増しが行えなかったことから、夏場の調達に不安感がある。スギ集成材の製品価格は若干見直されたものの、採算的に厳しい状況が続いているため、今後とも適正価格を目指す取り組みを続けることが重要であると考え。製紙用広葉樹原木は入荷量が3月をピークに激減に転じており、この夏に途切れるのではないかととの状況となっているが、打開策は見当たらないのが現状である。在庫量も大幅に減少している。
- 中間土場の設置が進んでいるため越材が少なくなっていることで虫害防止に役立

っているととも、物流 2024 年問題や積雪期の需給調整のために設置活用を今後とも進める。物流について、待機時間が長いため、積み込み時の検知等時間短縮や納入先での待機時間の解消等のスケジュール管理が重要。AB 材の需要不透明による伐り控えから、燃料材の不足は今後も継続すると思われる。スギが供給過多となる場合は国有林において不足する用途への生産特化（高齢級スギ材や広葉樹等）を図るとともに、国内需要が増えなければ輸出対応も考えられるが、米中の輸入関税の影響が懸念される。また、大船渡林野火災の影響を受けた材を予定される選挙ポスターの掲示板に合板利用することを呼び掛けることを期待する。

- 北米からの輸入量が減ってきていることもあり、広葉樹への要望が日に日に強くなってきているが、要望に対して出せない状況となっている。建築基準法の改正により 4 号特例が変更されたことから、JAS 材に関して住宅を建築するときの供給不足が不安である。FSC と SGEC に対する要望が減ってきているため、今後どうなっていくかを注視していく必要がある。また、CLT に関して様々やっ払いこうとしているがコスト高の問題で現段階からあまり進んでいないのが現状である。GHG に関しては、大きな企業ほど二酸化炭素排出量を計算してほしいとの要望がある。排出量に関して、林野庁は様々なプログラムシステムを出しているが一人親方など計算が難しいと思われるため、製材所から山元も含めて実際にどこまで計算できるか、全国規模で現実的な対応を今後考えていく必要がある。
- 原木が量産工場・合板工場に流れ、A 材を扱う中小の製材工場では原木確保に苦慮しており、原木在庫も大きく減少している。また、これから国有林の生産請負体制も始まり民間材の出材量が減少するため、お盆までこの状況が続くと考えられる。これから虫害の心配もあるというジレンマの中、どのように原木を集めていくか、悩みとなっている。また、秋田県の強みである 3.65m 材の不足分を 4m 材で補填しているところも見受けられるが、これからの 3.65m 材の確保は非常に困難であると予測される。素材の輸出に関して、4 月に中国木材（株）が太丸太の価格を上げたことで山元から中国木材（株）へ運ばれる素材が増えたため、能代港から中国への輸出量が減少した。
- 現在、国産針葉樹合板の荷動きは依然として当用買いが中心であり、合板メーカーは生産調整継続で需給は低位で安定している。今後に関して、需要が改善している雰囲気がないことから、最悪期を脱した程度で先行きの不透明感は続く。また、合板メーカーのコスト環境は厳しさを増しており値上げの姿勢が強く、合板価格は全般に強基調で推移している。
- 素材に関して、民有林では少なからず素材生産をしているが、材質が悪く、集成材やバイオマス向けが大半となっており、良材は不足している。また今後、素材生産業者が国有林に入るため、一般流通材が減り、更に不足する可能性が高いと予測される。製材品は製材工場の原木不足で供給が細っており、流通内在庫も非常に少ないが、思っていたほどの不足感はなく、需要もそれなりに薄い。ただし、多少なりとも製材品の販売量が増えれば、流通在庫も無いため、納期が遅れる可能性が高まる。素材生産、製材ともに、人材不足・残業抑制・休日確保から急な需要に対しての供給能力がなく、現在の生産量のまま推移する可能性が高いと予測する。そのため、需要の高まりとともに、原木・製品ともに不足することから、価格は上がる

傾向にあると見ている。

- 住宅着工数・素材生産・丸太価格が東北各県バラバラであり、どのように理解するかは次回以降の推移を見ながら東北エリアの木材がどのようになっているかを改めて考えてきたい。需要・素材生産量の落ち込みの中、広葉樹の生産及び輸出がバッファ的な役割を担ってきたと考えられる。地域では低位な林分の素材生産を放棄している実態が見受けられ、このままでは素材生産を維持しにくい状況が懸念されることから、関係者全体で対応していく必要がある。また、物流 2024 年問題において、総括とまではいかなくても影響が見られるかどうか注目していたが、こちらに関してももう少し様子を見ていく必要がある。丸太の輸送は、距離と量でどの価格設定で頼むか分かりにくいため見える化を図り、人材を育成していくことが林業全体の安定化に結び付いていくと考える。